

三 篆刻の学習

1 書と篆刻

印章、印鑑、印判、はんこなどと呼んでいる実用印に対して、芸術として行う篆刻では、印あるいは雅印と呼んでそれらと区別する。

篆刻は、書と共通点が多い。文字を素材として、印刀で（筆で）、印材（紙に）、刻る（書く）という類似の活動によって、造形と線の美を追求する。普通、篆書が用いられるが、16ページ上の印例のように、その他の書体や仮名などでも行われる。

印は、書画に押されるだけでなく、印箋に押した印影によって印材とともに鑑賞することも行われる。印箋をまとめて製本したものを印譜という。

書や絵の作品に筆者の証として用いられる場合、それを落款印という。



「漢委奴国王」印

石や木などの印材に「篆書を書いてこれを刻す」ことを篆刻という。

中国では、古く春秋戦国時代から印を官位の象徴として用いてきた。上の「漢委奴国王」印はそれを物語る遺品で、今、会社や官庁で使っている実用印も、その伝統につながるものだといえよう。一方、芸術としての篆刻は、明時代から発達し、書の一分野として行われてきている。

筆者の証としての役割りだけではなく、白と黒の世界に朱が加わることによって独特の美的効果もたらされることから、落款印は、書作品にとって欠かせないものになっている。

漢字の書には、署名の下または横に印を二顆（印を数える単位）押すのが正式で、一顆だけにしたたり、署名をせずに印だけにしたたりすることもある。二顆押す場合は、姓名印、雅号印の順にする。姓名印は白文（陰刻）、雅号印は朱文（陽刻）にすることが多い。

作品の右肩に引首印を押すこともある。引首印は長方形のものが多く、雅語を白文または朱文にする。

仮名の書には、落款印を一顆だけにすることが多い。また、引首印は用いない。



永懐

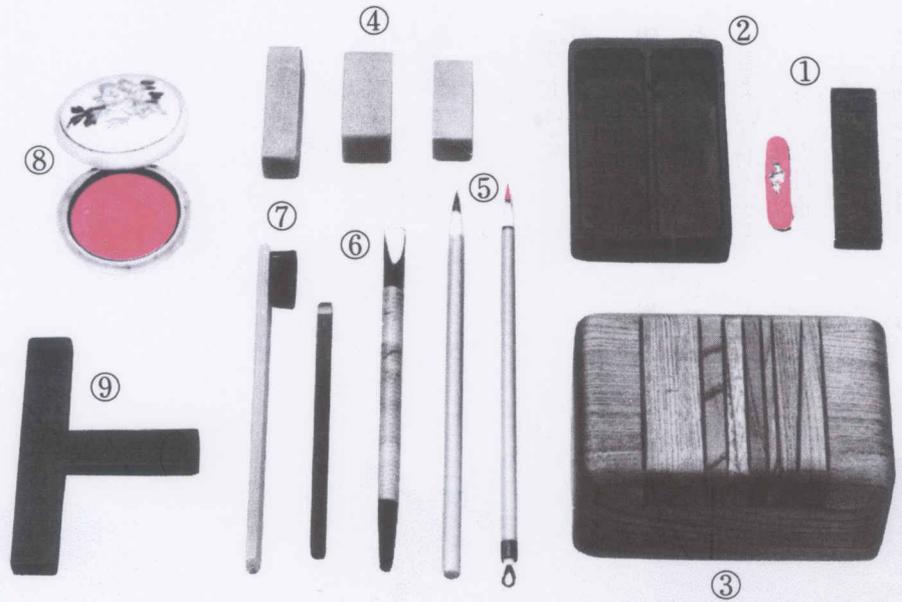
引首印

姓名印

雅号印

(兼毫・中鋒筆 34×63 cm)

2 篆刻の用具・用材



- ① 墨、朱墨
- ② 硯(二面)
- ③ 印床(篆刻台)
- ④ 印材
- ⑤ 小筆(二本)
- ⑥ 印刀
- ⑦ ブラシ
- ⑧ 印泥
- ⑨ 印紙

右記のほかに、印面を平らにするためのサンドペーパー(荒目と細目)、半紙、字典、鏡、ガラス板を用意するとよい。

3 印篆(繆篆)

篆刻では、小篆や印篆をよく用いる。印篆は、漢代の印に用いられた印専用の篆書で、繆篆ともいう。もともと小篆を四角の印に合うように工夫したもので、漢代の隷書の影響を受けて、点画が簡略化されたものが多い。

惠	京	小篆
惠	京	印篆

智	知	小篆
智	知	印篆

和	郎	小篆
和	郎	印篆

4 印稿の例

松本美保(白文)



上野剛印(白文)



美保之印(朱文)



剛印(朱文)



- (1) 姓名印は、多くは白文で刻られる。
- (2) 白文は線を太めにし、朱文は線を細めにする。
- (3) 二文字の場合、左右同じぐらいの大きさで、印面いっぱい構成するようにする。
- (4) 名前のあとに「印」「之印」「之章」「印信」などの文字を加えることもある。

5 刻る手順

開始

1 印面を整える

▼ 篆刻のための用具・用材や字典などがそろっているかどうか、確かめる。

▼ ガラス板か堅くて平らな台の上にサンド・ペーパーを置き、用意した印材の印面を平らにする。

▼ 印面が平らになったら、墨を塗っておく。

▼ このとき、印刀も砥石で研いでおく。

2 選文・検字

▼ 刻りたい語句を決め、篆書字典で字形を調べて書き出す。

(ここでは「知子」と刻ることにする。)

3 小篆を用いるか
印篆を用いるか

▼ 小篆なら小篆、印篆なら印篆どうしを組み合わせて用いるようにし、半紙に草稿を作ってみる。

4 印稿をつくる

▼ 白文(陰刻)にするか朱文(陽刻)にするかを決め、朱と墨で、印面と同寸の印稿(印の下書き)を入念に作り上げる。

5 布字(字入れ)

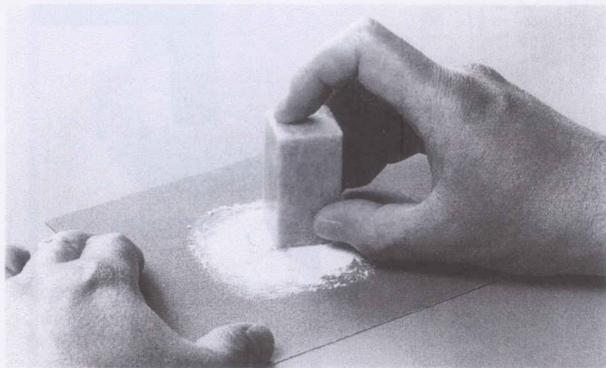
印稿通しのできているか

▼ 印稿を見ながら、印面に、裏返しに見た形を朱と墨で書き入れる。透明な紙に写しとって裏返しに見て書いてもよい。

(白文、朱文ともに墨を塗った印面に、文字は朱で書いていき、墨で修正する。)

▼ ときどき、印面を鏡に写して、正しく布字できたかどうか確かめる。

①



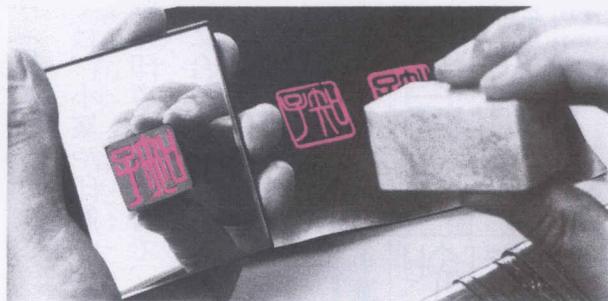
②



③



④



〈印稿とその布字の例〉

(白文) 美保



(朱文) 美保



5 運刀

運刀法には、刀を手前に引いて刻る「引き刀」と、手前から向こうに押し刻る「押し刀」があるが、ここでは「引き刀」を使って説明する。

白文は、まず、線の右側から印刀を入れ、下方に向かって引き刀で刻る。次に、印面を180度回転させて、反対側を同じように引き刀で刻り、線を白ぬきにする。

朱文は、線の左側から刀を入れ、白文と同じ要領で反対側に移り、線を残して刻る。

刻る時は、まず刃先を石にくい込ませ、そのまま手前に線を引いてくる気持ちで刻り進める。線の左側がバリバリと欠けていくぐらいに力強く運刀するのがよい。

6 押印・補刀

刻り終わったら、印面の朱や墨を水で洗うか拭き取るかして落とし、印泥をつけて押印する。

ガラス板に半紙を数枚敷き、その上で押す。

刻り方の不十分な箇所があれば補修し、不要な刻り残しがあれば除去する。

印箋に押印して、完成。

後片付けをする。

印箋を展示して鑑賞する。また、製本して印譜を作り、互いに交換する。

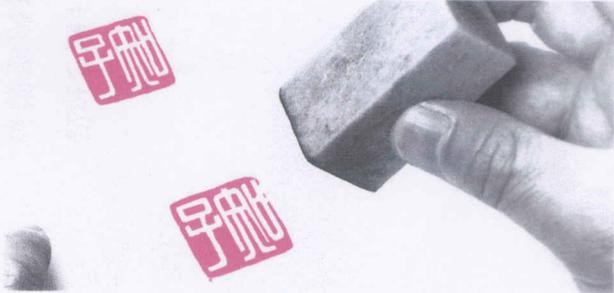
終了

7 印箋に押す

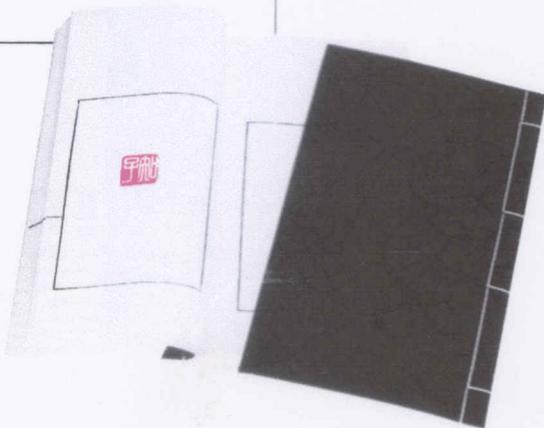
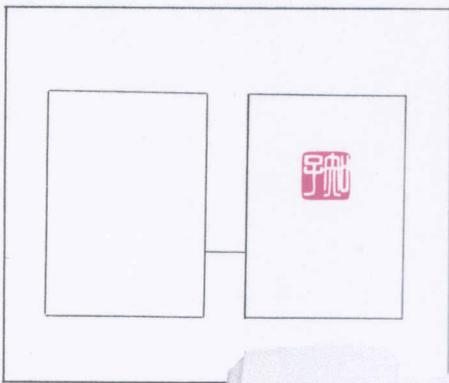
⑤



⑥



⑦



(単鉤法)



白文



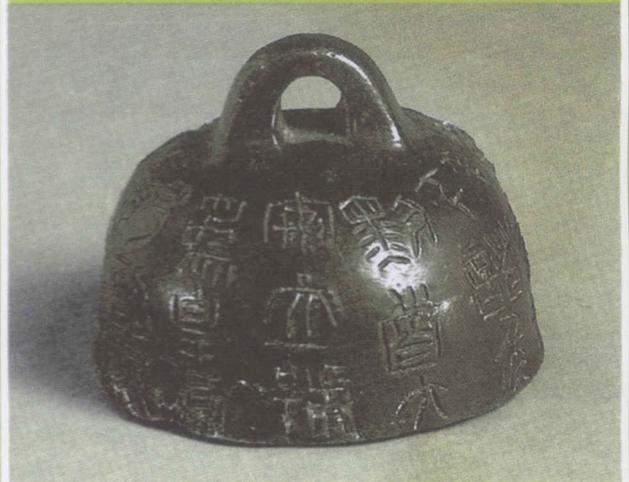
(握刀法)



朱文



二 篆書の学習



秦代の銅の権=分銅

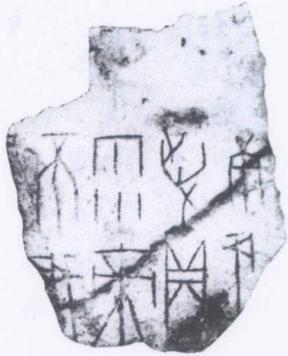
篆書は、漢字の五書体のうちでもっとも原初的な書体である。
象形的な要素を保っていて、複雑で構造的な点画と造形には、他の書体がない独特のおもしろさがある。代表的な遺品を鑑賞し、臨書して、篆書の用筆、運筆と造形の基礎を身につけよう。

① 甲骨文 殷



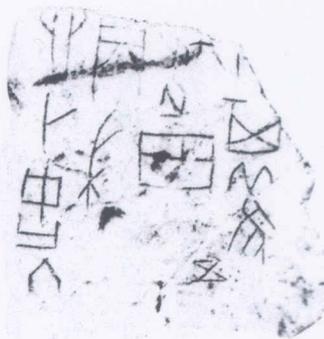
(原寸)

→ 其幼(嘉)。
貞。帝(婦) 妊



(原寸)

← 庚戌(ト)。
貞。雨 帝(ト)。
不我(ト)。



(原寸)

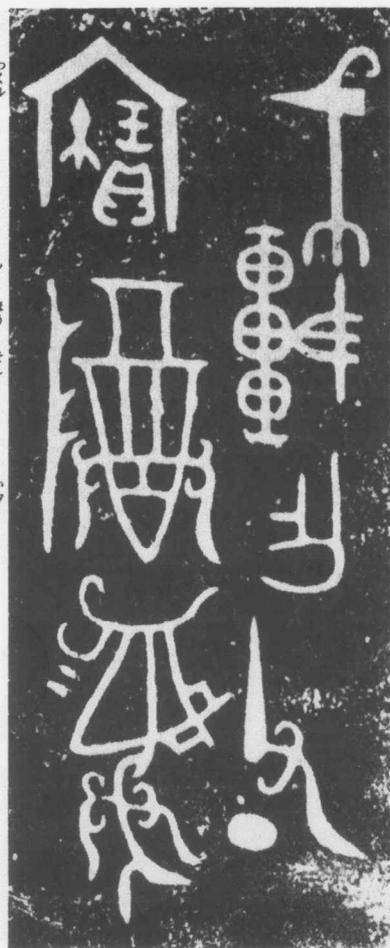
→ 其蕞(?)。
妊 田(ト)。
貞。帝(婦) 卯 卜。 虫

1 さまざまな篆書

漢字のもっとも古い状態を伝えているのは、紀元前十四世紀から紀元前十一世紀ごろにかけての殷の甲骨文である。亀の甲や獣の骨に刻まれた文字であるところから、亀甲獣骨文、または契文とも呼ばれている。内容は、主に占いにに関する記録で、時期によって字形や書風に変化があることが確認されている。

殷の王朝、およびこれに続く周の王朝では、祭祀のための銅器の鑄造が盛んであ

② 金文 殷



(縮小)

戰 午(作)ニ父丁ノ寶障(尊)彝

③ 楚帛書 戦国



(部分・やや拡大)

又 卮(淵)口 涸(涿)。是 胃(謂) 字。字 戠(威) 口 月。内(入) 月。……
〔閏之〕勿 行。一月二月三月。是 胃(謂) 達 終。亡 奉。……

④ 秦詔版銘 秦



(部分・やや拡大)

廿六年。皇帝 并兼天下。諸侯 黔首〔大安〕

たが、これらの古銅器に施された銘文（金文、または鐘鼎文と呼ばれる。）も、古代漢字の姿を知るうえでの貴重な資料である。金文の多くは鑄込まれた筆跡であることもあって、刃物で刻された甲骨文とはかなり趣が違っている。

甲骨文・金文に続くものに、周王朝の末期の、いわゆる戦国時代の石刻文字（石鼓文など）や布帛に筆写された文書（楚帛書）などがある。また、同じ戦国時代には、刀刻による銅器の銘文や、竹簡に書かれた肉筆文字などもあって、書風も多様である。紀元前三世紀、秦の始皇帝は天下を統一すると、文字にも統制を加え、後に小篆または秦篆と呼ばれる公定の書体を確立した。当時の石刻文字や度量衡の器物の刻文などにそれを見ることができると。

次の漢代の器物の銘文や印章などに見られるものを含めて、甲骨文以降の一連の古い書体のことを篆書と呼んでいる。篆書とは、隸書以前のあらゆる古い文字の書体の総称であると考えてよい。